

学 位 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

1. 申請者氏名	中山 智貴
2. 審査委員	主 査：（岐阜大学・准教授） 田中 伸 副主査：（岡山大学・教授） 山田 秀和 委 員：（兵庫教育大学・教授）福田 喜彦 委 員：（兵庫教育大学・教授）山内 敏男 委 員：（鳴門教育大学・教授）原田 昌博
3. 論文題目	民主社会への「文化的参加」を目指す子どもの市民性育成論 ―学校と社会の共同創造に取り組むドイツ文化・政治教育からみた地域協働の探究―
4. 審査結果の要旨	教科教育実践学専攻社会系教育連合講座中山智貴から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。 論文審査日時：令和6年7月13日（土） 10時00分～11時00分 場 所：Zoomによるオンライン開催 1. 学位論文の構成と概要 序 章 本研究の目的・意義 第1章 理論的枠組み 第1部 学校と社会の連携における非対称的な目的性 第2章 学校と社会の連携による地域協働カリキュラムの動向と課題 第3章 地域協働カリキュラムにおける地域社会の視座：博物館の質的調査 第2部 民主社会への「文化的参加」を目指す子どもの市民性育成論の解明 第4章 ドイツにおける文化・政治教育の接合：「文化的参加」を中心に 第5章 親和的空間を媒介した「文化的参加」の実現：ヒストリーマシンの場合 第6章 熟議的空間を媒介した「文化的参加」の実現：PB in Museenの場合 第7章 闘技的空間を媒介した「文化的参加」の実現：AntiAntiの場合 第8章 民主社会への「文化的参加」を目指す子どもの市民性育成論 終 章 本研究の成果と課題 概要は以下の通りである。 本研究は、学校と社会の連携による地域協働体制の構築に関して、ドイツ文化・政治教育における共同創造の取り組みを事例にして、民主社会への「文化的参加」を目指す市民性育成論を解明しようとするものである。まず、本研究の理論的枠組みとして、第1章では、学校と社会による地域協働体制の分析視点である子どもの「参加」に着目し、人権としての参加を前提として、参加行動を規定する個人的・構造的条件の統合を目指すドイツの参加枠組みを援用した。 第1部の構成は、以下の通りである。第2章では、これまでの学校と社会の連携体制に関する先行研究を「地域協働カリキュラム」として整理した。ここでは、第1章で援用した参加枠組みをもとにし、学校と社会の地域協働が、①どのような目的性を持ち（カリキュラムにおける参加の個人

的條件)、②異なる機関の協働をデザインするか(カリキュラムにおける参加の構造的條件)、の2点に着目するものである。次に、第3章では、地域協働カリキュラムにおける地域社会の視座を検討した。ここでは、地域協働カリキュラムの事例として博学連携を取り上げ、学校と連携・協働する学芸員の語りに着目して、質的調査を実施した。連携・協働におけるミュージアムの役割理解という、ミュージアムの視座から地域協働カリキュラムを捉え直すことで、学校と社会の連携による教育の目的性を再検討した。また、学芸員の特徴的な役割理解を示す事例として、石川県西田幾多郎記念哲学館及び豊田市郷土資料館の事例を取り上げた。ここから、地域社会の視座が学校との相互作用の中で生起し、連携・協働を通して自身の役割を捉え直そうとするものであることを明らかにした。

第Ⅱ部の構成は、以下の通りである。第Ⅱ部では、第Ⅰ部の課題を引き継ぎ、学校と社会の連携における特徴的な事例である現代ドイツの文化・政治教育とその節合に着目し、民主社会への「文化的参加」を目指す市民性育成論の解明を進めた。第4章では、現代ドイツにおける文化・政治教育の節合点としての「文化的参加(Kulturelle Teilhabe)」に注目し、文化的表現形式の獲得や文化的・社会的な生活への参加を目指す文化教育と、個々の市民としての政治的能力の獲得を目指す政治教育の関係性を整理した。また、ドイツにおける「文化的参加」の展開と特質を、政策的視点から分析した。ドイツにおける教育文化政策の特徴である「文化分権主義」、「州の文化高権」、「補完性の原則」をもとにして、連邦国家レベル及び州レベルにおける政府・行政セクター、市民社会セクター、の2点に着目して、「文化的参加」の展開と特質を明らかにした。連邦・州政府レベルにおける「文化的参加」の分析から、「文化的参加」を実現するアプローチとして、①諸コンピテンツやアイデンティティの形成による個人の自己形成アプローチ、②芸術や文化を通じた包括的な参加を目指す社会的結束アプローチ、③社会参加の基礎を形成する問題解決アプローチ、の3類型があることを示した。そこで第5章では、ハンブルク州のヒストリーマシン・プロジェクトを事例として、社会的結束アプローチに基づき親和的空間を媒介する「文化的参加」の実現を目指した教育プロジェクトを分析した。ここでは、ユダヤ人の歴史・文化に関するデジタルマップというオンライン空間を軸としながら、子どもが自身の関心に合わせた映像制作を通じた自発的な学びを促す親和的空間を媒介していたことを明らかとした。次に、第6章では、ベルリンの博物館島に所在するハウス・バステリアン文化教育センターとイスラム美術館の協働で開発したPB in Museenプロジェクトを事例として、問題解決アプローチに基づき熟議的空間を媒介する「文化的参加」の実現を目指した教育プロジェクトを分析した。ここでは、プロジェクトで用いられた、現代社会における歴史的史料のシンボリックな意味を探究する学習者用ワークシートに着目し、展示を通して参加者とミュージアムが議論する熟議的空間を媒介していたことを明らかとした。そして、第7章では、フランクフルト・ユダヤ博物館のAntiAnti: Museum Goes Schoolプロジェクトを事例として、闘技的アプローチに基づき闘技的空間を媒介する「文化的参加」の実現を目指した教育プロジェクトを分析した。ここでは、子どもの周囲に存在する「差別」「対立」に関する自己反省を通して、ユダヤ人差別やポスト移民社会を考察することで社会問題に対する自身の位置付けを更新し続けてゆく闘技的空間を媒介していたことを明らかとした。

以上を踏まえ、第8章では、これまでの議論を総合的に考察し、民主社会への「文化的参加」を目指す市民性育成の論理を明らかにした。そして終章では、本研究の知見について、民主社会への「文化的参加」を目指す子どもの市民性育成論の観点から整理し、本研究のまとめとした。

2. 審査経過

審査に先立ち、Zoomによる公聴会を実施した。論文概要についての発表の後、質疑応答がおこなわれた。その後の審査委員会では以下の点について審査が行われた。

① 研究の独創性及び発展性

本研究は、学校と社会の連携による地域協働体制の構築に関して、ドイツ文化・政治教育における共同創造の取り組みを事例にして、民主社会への「文化的参加」を目指す市民性育成論を解明しようとするものである。本研究では、博物館を「有意義な学びの空間」と捉え、教師や学芸員への質的調査を踏まえ、社会科教育領域から学校－博物館間の関係性を捉え直した点に独創性が

ある。また、その際には、ドイツ市民性教育実践において教科教育と課外教育の協働を示す概念である「文化的参加(Kulturelle Teilhabe)」に着目し、全16州で行われている学校・地域、文化研究機関などとの連携状況を分析した上で、その枠組みに基づき文化的参加を目指した学びの類型を設定し、具体的な学習として示している。博物館と学校が考える学びの目標のズレの解消ではなく、各々の機能が有機的に融合する学びのあり方を、実際の授業に即して具体的に示した点が評価された。今後は、ドイツだけでなく、特にアジアの事例にも着目し、博学連携の異なるアプローチの分析を行うという研究の発展性への言及もあり、本論文を踏まえた研究の発展可能性についても評価された。

② 学校教育実践への貢献

本研究は、学校と社会の連携における特徴的な事例である現代ドイツの文化・政治教育とその節合に着目し、民主社会への文化的参加を目指す市民性育成論の解明を進めたものである。ドイツでみられる3つのプロジェクトに基づき、子どもが文化的参加を行う具体的な方略を目標・内容・方法・評価から実体的に明らかにしている点に特徴がある。また、学校での授業開発の際、学校教員と博物館の学芸員が如何に連携をすることが出来るのか、その視点や実際の連携方法についても質的調査を元に明らかにしている。

このような、学校が博物館と連携した市民性教育のあり方を具体的に示した点は、学校3.0時代を見通した社会参加学習の新しい展望を拓く可能性のある研究であるとの指摘もあり、学校教育実践への貢献が高く評価された。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は中山智貴の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。